

沖

俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

筆の香

能村 研三

老いてなお

最近、私が選をしている新聞、雑誌で出会った句にこんな句があった。

卒寿なほ削めるくらし春隣

熊本県 河地 暹

燃ゆるもの老いてなほ欲しシクラメン

東京都 西堀 愛美

余寒なほ我が晩学の襟止

千葉県 福田 明

筆の穂を噛めば筆の香二月来る

きさらぎや転向こぼむアナログ派

酒肆の灯が路地より洩れし忘れ雪

百畳の風を背に涅槃像

この三句には共通して、「なほ」という副詞が使われている。いずれも八十年代を越える方々のようだが、一句目「削める」とは「始める」とほぼ同じ意だが、「新たに物事を行う」ようになる。今まで行われなかった物事を、新たに行う。」とある。卒寿になつても常に前向きな作者の心に感心した。二句目は前句と同じように、齢を重ねても枯れることなく、燃え続けたい気持は大切である。シクラメンの季語が華やかさを添えて、その前向きな気持を応援している。

黒松の直幹を打つ涅槃雪

涅槃図の真筆偽筆ともかくも

固干しの目刺の苦味気骨人

陰暦の換算早し梅月夜

閨室に待つ一艇や大根咲く

柸挿す我が背丈よりやや上に

三句目の「なほ」は余寒にかかつて
いるが、春の寒さの中でも晩学に向か
う心たむぎなきがうかがえる。

ここに掲げた三句は老いてもなお学
ぶという気概が感じられる句である。

幕末に活躍した儒学者・佐藤一斎は
「少くして学べば、壮にして為すあり。
壮にして学べば、老いて衰へず。老い
て学べば、死して朽ちず」と、言つて
いる。つまり「子どものころに勉強し
ておけば大人になってから仕事やなに
かにそれを活かすことができる。大人
になつてから勉強すれば、老いても衰
えない。」ということである。私の周り
でも、定年後にすべての肩書きがなく
なつてから、大学へ通つて勉強してい
る人がいるが、年齢を経てから俳句の
句作を続ける人たちも「老いて学べば、
死して朽ちず」という姿勢を貫き通す
素晴らしさを発見した方々なのだろう。

蒼茫集



雪

大畑善昭

あるだけの気力体力雪搔けり
猟銃の外れし弾か木に刺さり
北上川かんかん冬の星撒かれ
鴉らもひもじくあらん雪を漕ぐ
雪一面路肩を逸れし深轍
雪折れの折れ目の痛みまざとあり

等 圧線

田所節子

冬空のビル暁紅に柱なす
寄鍋や等圧線は間合つめ
干し物の冬の日ざしを抱き取る
煤逃や肩車して出掛けたる
カーナビの知らぬ道抜け冬うらら
大年やがうがうと刻過ぎゆきて

鳥総松

成宮紀代子

奥に奥ある短日の京町屋
遠火事と思へど闇の音を追ふ
元朝の国旗すつくと仕舞屋に
真間川の水のごゑ聞く大旦
八幡藪知らず小路の鳥総松
初場所や取的是下駄弾ませて

遡 上

千田百里

天狼や日本の道は海に尽き
魚のごとしや歳晩の街遡上して
返り花けふはスカートでも穿かう
飴切つて切つて門前町の除夜
寒茜魂売るごとく本を売り
茶が咲いて子供一一〇番の家

沈黙のにぎはひ

北川英子

つらきこと多き年なり惜しみけり
底知れぬ暗き寒夜の充電灯
帰つて来てね待春の再入院
湖北より雪の匂ひの見舞客
沈黙のにぎはひ夜の雪降り積む
妻恋坂登れば病棟寒茜

初富士へ

遠藤真砂明

鰯網の明日へ秘めたる脹り力
妻と「よいしょ」生きる息吹の年用意
初富士へ転舵の汽笛かがやかす
地震はしる北の恵方に父の海
初風の光源となり出航す
黒潮本流完璧の四温晴

絵 双六

安居正浩

旅立ちはや千住でありぬ絵双六
帰心はや鱈の切り身の透き通る

冬の日を束ね命をふくらます
ゆつたりと柚子湯にをれば哲学者
狐火を見たと言ふ子の目に炎
初雪や語感やさしくやはらかく

ついと来て

辻美奈子

初風やわが身を小さき舟とせむ
逝かしめし日を掌中に年守る
かなしみのついと来て去る雪ばんば
万象を蔵して櫂枯るるなり
落葉踏む根の国すこし近うして
日脚伸び万年筆の筆跡に

怒濤の輝き

杉本光祥

若水で沸かすコーヒー香りたつ
連凧に今年の運を託しけり
三日はや体育館に声あふれ
霜柱踏んで心の弾みたる
初雪も祝ひてくれし母上寿
大鵬逝く流水怒濤の輝きに

鷹匠 森岡正作

鷹匠の一笛が統ぶ二日かな
湯豆腐を吹きしがらみもなき暮し
勝ち独楽に勲章の傷一文字
板チヨコの直線優し雪催
雪しまく背後より来る津軽弁
故郷に背を向けて吸ふふぐと汁

まばたき 林昭太郎

まばたきは瞬の黙禱冬銀河
返答を待たれてゐたる懐手
明らかに湯冷めの声の電話なり
着膨れて失せざるものに負け嫌ひ
小春日や反りを緩めて太鼓橋
山眠り猫に丸みの加はりぬ

既視感 細川洋子

枯野とはふつと既視感つのるかな
利いた風な口をきく娘や切山椒
山麓に多宝塔おき眠る山
大奥の跡地ころころ竜の玉

大寒のずどんと届く米袋
瘤白く小さく浮く画像えよ雪催
大海原 荒井千佐代

旗日なり規則正しく冬の波
すべて断つ修道院や蔦枯れて
道連れの相手わからぬ夢はじめ
パプリカのひときは赤き寒九なる
朝よりの雨が氷雨となる逢瀬
大根干すころ大海原へ向け

羽根いちまい 楠原幹子

一陽来復ボール遊びの子等の声
孫の描くわが顔の皺クリスマス
言ふべきは言はねばとこそ冬董
穏やかな青空たまひ喪正月
父祖よりの檜太らせ山眠る
雪女消えて残りし羽根いちまい

初芝居 鈴木良戈

緞帳のそろりと動く初芝居
小豆粥妻は古式を守りをり
初風の雲の便りを伝へけり

大雪の夕べ明るき小名木川
雪の日や砂町銀座賑やかに

東京駅 上谷昌憲

冬暮光東京駅を縦に撮る
数へ日の小回り利かす郵便車
濠の瞰に金の輪郭浮寝鳥
千枚漬望郷の糸曳きにけり
モニターに迫る冬霧着陸す
雪だるま仕上げの帽に植木鉢

深雪晴 河口仁志

喪に籠る友へ一筆寒見舞
充電の年と決めたる初日記
冬蝶のしばし瞑想日だまりに
みぞるるやかの日記憶耕二の忌
折鶴の飛び翔ちさうな深雪晴

潮満つ 溯上千津

あらたまの胸突き八丁九十歳
ひと見舞ふ初旅にして潮満ち来
賜れり最高齢の初選句
風に鳴り陽に紅そだて冬芽垣

可能性いち分に賭けて寒すばる
耐寒の歩くため行く小買物

音 又 湯橋喜美

傾ける月より音又去年今年
かばかりの幸数の子を噛みてをり
踏みしめて雪の感触こそ天恵
一人ではまだ踏めぬ子に雪こんこ
念力のゆるみて屋根の雪しづる

人待つところ 酒本八重

人等みなおつとり暮す松の内
初空へしづかに山の起立せり
その櫓こそ父なるぞ冬木なり
寝積みて声がきれいになりにけり
梟は賢きまなこしてゐたり
老いてこそ人待つところ年明くる

湖茫と 羽根嘉津

見馴れたる狭庭の暁の淑気かな
這ひ這ひの子の名も記すお年玉
湖茫と後は忘れし夢はじめ
餅花や祖母の世の事子に孫に
マラソンのしんがり送り山眠る

潮鳴集

雪合戦

福島

茂

一瞬の水尾の残照鴨翔てり
地吹雪の去つて一村無垢となる
空に鳶地上に蒲団叩く音
直線も拋物線も雪合戦
霜柱踏んで一瞬無重力

エスプレッソ

栗原公子

若き日は気づかぬことも花八つ手
水仙花わたしは私と言ひきかせ
人日やエスプレッソの苦味濃し
冬木の芽身のうちに抱く熱きもの
一病を同士とさだめ去年今年

蘇生の器

佐久間由子

みづうみは蘇生の器白鳥来
日当りて枯山迫る休み窯
切岸に天射るかまへ鷹一羽
磯松の力秘めたる初山河
ほのぼのと家がふくらむ三が日

梵字

菊地光子

香をはこぶ生絹の風や冬至梅
寒晴や梵字のやうに木々並ぶ
ぼろ市や代官餅の杵の音
深川は雨もまた佳し切山椒
箸置の鶴は丹頂女正月



第58回角川俳句賞
受賞作品50句

間取函

広渡 敬雄

露生みて露を走れり雪解川
呼笛の紐のくれなる獵期果つ
陰干しの黄檗染紙浅き春
裏山のしづかな日なり雛飾る
初蝶や一筆箋のはなだいろ

水音の近くに雲や蓬摘む
流木の裂け目に砂や鳥曇
燕来る口に含みて釘の艶
三鬼の忌白靴墨の匂ひけり
花冷や丸まりて紅鉋屑
包帯の白の粗さや蝶の昼
雪形や少しく曲る麦の畝
日をおいて読みかへす文梨の花
机より大きな椅子や鳥の恋
幹軽くたたきて巢箱かけにけり
おがくづの山の湿りや春の蟬
一休の書や春眠を貧りぬ
口大きく開けて日本の燕の子
赤ん坊の肘の窪みや緑さす
かほに照る水かげろふや山葵採

人文字のぱつと散らばる青あらし
啄木の写真に妻や薯の花
麦熟星一反ばかり刈り残り
ふりかけに混じる山淑朝ぐもり
竹刀振るだけの稽古や夏うぐひす
白鷺や水張りて田の遠くあり
にはとりの潜つてゆける茅の輪かな
間取図に手書きの出窓夏の山
みどりごの旋毛をなぞる涼しさよ
岩清水汲みしコップに山の影
鳥籠に鳥しづかなる夏書かな
祭り櫓大きな空を従へて
雲は秋折り目のつきしグラシン紙
土星に環ストッキングの掛けられて
ヨットより上がりし人の傾ぎたる

帆船の綱匂ひくくる秋燕
髪切つて屋上にゐるいわし雲
蹄やや開きて角の伐られけり
押し返すチューブの空気豊の秋
横顔は子規に如くなしラフランス
落葉籠運ばれてゆく匂ひかな
耳りんと立ちて甲斐犬冬に入る
隈笹に降る雨音や牡丹鍋
むらさきの山の端近し餅配
神棚の幣に微風や寒造
凍滝の中の吹雪いてあたりけり
寒鰯の胴に朱書きの値札投ぐ
晩年の犬の歩みよ冬たんぽぽ
日脚伸ぶ刺されしままの畳針
雷のあと途切れずよ猫の恋

沖作品



月山が陣張る雪の鎧着て
雪迎へ達者でをれと置き葉
余生とは爪先立てる初氷
根雪来て暫し大地に別れ詩
積雪にひと文字何を描こうか
瑠璃色の小鳥来てゐる龍の玉
北上の川幅広く白鳥来
陽の透けて柔かなりし枯木山
冬怒濤巖菩薩の影帯びて
集乳缶触れて音たつ寒さかな
磨きたる窓に冬日をあふれさす
縫初の窓辺に糸を通しけり
白鳥のゐるひとところ蘆明り
枯蘆へ対岸の風潜り込む
びりびりと裂けゐる寒の空気がな

山形

佐藤 淑子

岩手

吉川 隆史

高橋 和枝

能村研三選

海峡や胸襟閉づる北つぶて
廃屋の壁の装ひ蔦紅葉
雑貨屋の居間に声する冬ともし
一片に批もゐるはず冬北斗
牙返るCTスキャンの透視力
凍滝の中途半端な止まりやう
冬青空背番号にて子をさがし
隙間風番屋の奥にかまど跡
バス停の屋根に落葉の縞模様
硬貨ゆきかふ小春のフリーマーケット
冬の日の匂へる古書の街に入る
朴落葉人訪ふごとく恋ふごとく
盛り一枚肴に義士の日なりけり
身の内に何の点滅クリスマス
座布団に冬日の座る一茶の忌

千葉

神戸やすを

東京

五十嵐章子

神奈川

菊川 俊朗

沖作品 15句選評

*
能村研

月山が陣張る雪の鎧着て 佐藤 淑子

佐藤さんは、山形支部に所属し月山の麓にお住まいの方である。出羽の国には霊峰と言われる出羽三山、つまり月山、羽黒山、湯殿山からなる三つの山は信仰の山々として、崇められている。月山は、地元の人からは神の山として「父なる山」とも呼ばれている。この句からも佐藤さんは地元で親しむ信仰の山として、自然に対する崇拜、畏敬の念をもっておられることが判る。月山は日本海側から季節風の影響で十メートルを越える積雪の山としても知られているが、月山の麓から見ると日常の風景は「陣張る雪の鎧」と表現したくなるのだろう。

集乳缶触れて音たつ寒さかな 吉川 隆史

吉川さんは岩手支部に所属し、かなり前から存じ上げている方だが、お仕事は酪農関係なのであろうか。酪農の仕事はテレビなどで紹介された程度のことしか知らないが、乳搾り、餌やり、牧草作りなど、しかも朝早くからお休みも取りにくいところだが、冬ともなれば、岩手県では氷点下何十度というところ

まで下がる厳しい環境。早朝から夜遅くまで牛の世話を続け、一年中休みのない生活が強いられる。そんな中で牛の乳を搾り集乳缶に集める時は至福な瞬間でもある。

びりびりと裂けぬる寒の空気かな 高橋 和枝

今回は東北の方が上位に続いたが、冬の厳しい寒さの中で詠む俳句には、はりつめたものがあつて読者を感じさせる。高橋さんが住む北国の厳寒の寒さは言葉では言い表せないものがあるのだろう。「今日は凍えるほど寒い」「冷え冷えした寒さ」「風などで身を切るような寒さ」「凍るような寒さ」など北国では、「寒い」と言うよりかは「痛い」と言ったほうが近い寒さなのだろう。

海峽や胸襟閉づる北つぶて 神戸やすを

この句を読んで冬の津軽海峽を想像した。私も以前津軽線の終点、三厩駅からバスで竜飛岬へ向かったことがあるが、吹雪くような天気の時はおそらくこの句のような思いになるのだろう。海峽を見下ろしていると頬へ叩き付ける吹雪と共に轟々と鳴り響く風音はちよつと恐怖感を感じるものだ。

凍滝の中途半端な止まりやう 五十嵐章子

凍滝の前に立つと轟々たる音もなく、落ちる水も凍りついたまま。沈黙と静止の世界で、時は止まったままだ。凍滝の中に閉じ込められているのはまるで止まった時間の世界にいるようだ。本来は轟々と音を立てて流れる滝が、動きも音も忘れて止まっている。中七から下五にかけての「中途半端の止まりやう」という着目の面白さに感心した。(以下略)